

東名遺跡出土の犬骨調査結果

東名遺跡出土犬骨群（約 7,000 年前・縄文時代早期）は、国内最古として知られる夏島貝塚（神奈川県）に次ぐ古さを誇る。保存状態が極めて良い同資料群は、形質の特徴の詳細を議論し得る最古の資料群として注目される。幸にして、先頃、それらとも年代的に近い、上黒岩岩陰遺跡（愛媛県）の犬骨も発見され、形態学、年代学、遺伝学、骨化学にまたがる領域横断的かつ総合的な共同研究が開始されることとなった（研究代表者：慶應義塾大学 佐藤孝雄教授）。そこで、佐賀市教育委員会では、同研究チームに比較資料としてこの東名犬骨群を提供、形質、系統、用途、飼育形態など、縄文早期犬の総合的な調査・研究を依頼した。

東名遺跡の犬骨は、第 1・2 貝塚から頭蓋骨、下顎骨、脛骨（図 1）など 107 点が出土。哺乳類の中では、ニホンジカ、イノシシに次いで多く（図 2）、狩猟の伴侶として飼育されていたものと推定される。今回はこれら犬骨のうち、形質は頭蓋骨 3 点、DNA は下顎骨 3 点、炭素・窒素安定同位体は下顎骨 11 点についてそれぞれ解析を行った。以下、その結果について概要を報告する。

【形質】（図 3～5） 今まで確認されている縄文時代前期から晩期の犬の特徴と同様、頭部から吻部にかけてのくぼみが目立たず側面観が直線的な形状を示す。縄文犬の中では大きな部類に属し、体高 43～47cm 前後と推定される。上黒岩岩陰のそれと合わせて、縄文犬のサイズ・ヴァリエーションが早期末から前期初頭までに出現していたことが確かめられた。また、前臼歯に生前失歯が認められるものがあり、猟犬として獲物の攻撃・捕獲に当たっていたものと考えられる。

【DNA 解析】 ハプロタイプ（遺伝子の組み合わせ）M1・M20 をもつことが確認された。M1 は現生の柴犬、秋田犬、紀州犬に知られるハプロタイプ、M20 は柴犬、琉球犬に認められる。このうち M1 は、縄文犬骨において、今回の調査で初めて確認された（上黒岩・東名）ハプロタイプである。この結果より、今日天然記念物にも指定されている列島在来犬種の遺伝系統が縄文時代早期にまで遡れることが示唆された。

【食性解析】（図 6） 上黒岩埋葬犬骨は、近接して出土した人骨と比較的近い窒素・炭素安定同位体比の値を示したことから、人の食べ残しを与えられていた可能性が高いことが分かった。一方、東名散乱犬骨の安定同位体比には多様性がみられ、縄文犬でも個体により食事の内容が一樣でなかったことが分かった。

最古の家畜であるイヌは、系統、形質、用途、飼育形態とも多様で、出土骨からそれらを調べるには、総合的な共同研究が必要である。今回の調査結果は、そうした共同研究がほとんど行われていなかったわが国において画期的な事例となった。

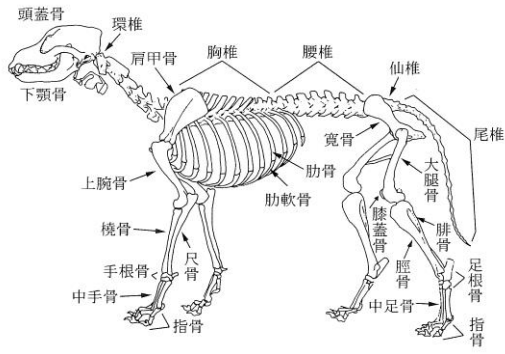


図1 主な骨格の名称

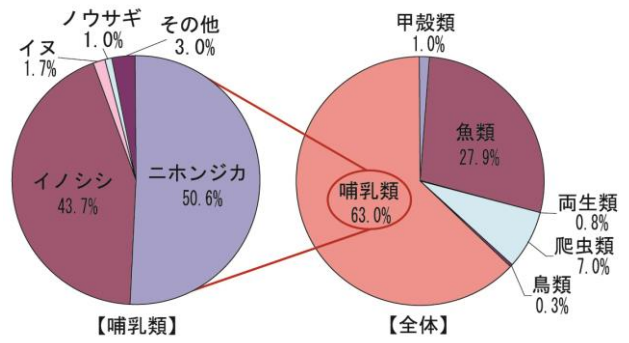


図2 出土動物骨の割合（東名）

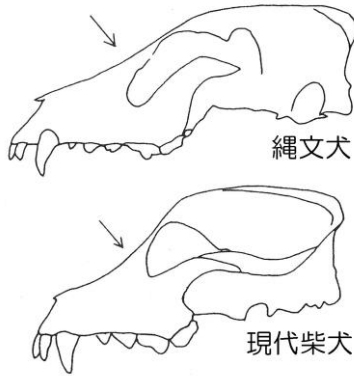


図3 頭蓋骨側面観の比較

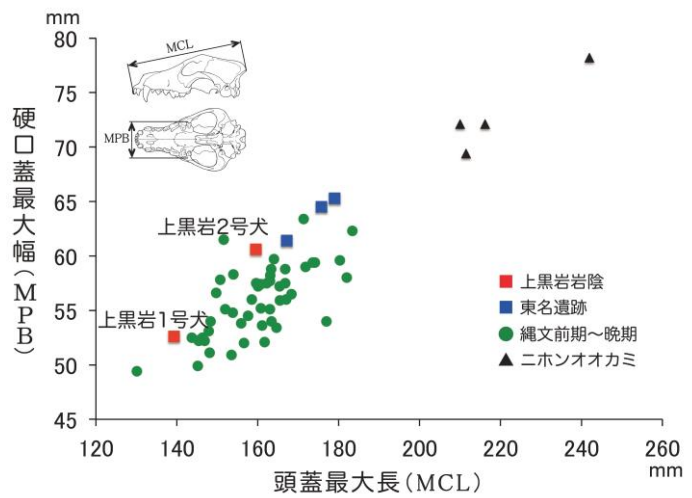


図4 縄文犬とニホンオオカミの頭蓋計測値



図5 生前失歯がみられる上顎骨

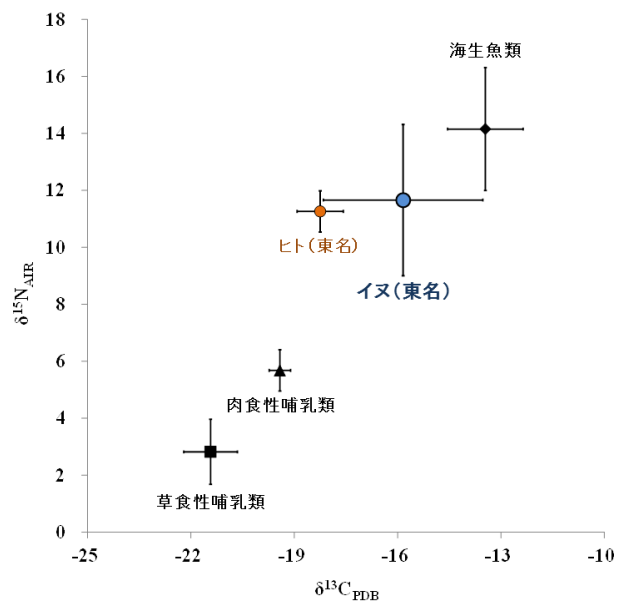


図6 人骨及び犬骨の炭素・窒素安定同位体比（東名）